

埼玉県トラック協会 防犯ブザー寄贈

3月26日(木)に、一般社団法人埼玉県トラック協会より、「光るトラック型ブザー」が寄贈されました。このブザーは、登下校の際に、「子どもが家まで安全に帰って欲しい」という思いから、今年の春に新しく1年生になった児童64名に贈られました。



みな

歴史散歩

No.21

曾根坂一里塚の阿弥陀塔(町指定文化財)

社会教育担当 望月 暁

秩父往還と三沢

秩父と熊谷の間に位置する皆野町は、古くから中継地点としての役割を果たしてきました。「秩父往還」という言葉は両者をつなぐ道の総称です。代表的なルートを見てみましょう。

まず、熊谷から寄居、長瀨町野上、町内金崎を経て秩父市大野原、同大宮町へ向かう「熊谷道(秩父大道)」があります。このうち寄居からは釜伏峠を越えて三沢芳の入へ出て、同広町から曾根坂峠を経て秩父市黒谷で熊谷道と合流するルートが分岐しており、「峠道」と呼ばれていました。一方で粥新田峠を介して三沢広町と東秩父村安戸を結び、川越とつながる「河越道」もあり、三沢が交通の要衝であったことが分かります。

曾根坂一里塚の阿弥陀塔

写真は「曾根坂一里塚の阿弥陀塔」です。緑泥片岩製で高さ109cm、幅は65cmです。中央に大きく「南無阿弥陀佛」、左右には「みきハ大ミヤ」「ひだり志まぶ」と刻まれます。ここから、この石塔は

供養塔であり、同時に道しるべとしての役割も果たしていたことが分かります。元禄15年(1702年)の銘が見えますが、これは同様の道しるべのなかでも古い時期のもので、下半分には「くわん志ゆ(願主)」の文字と並び「高橋喜兵衛心求(心求は法名)」、「は満」の文字があり、高橋喜兵衛・はま夫妻が願主となつてこの石塔を建立したと考えられています。「武州江戸浅艸加ミヤ市兵衛」、「江戸小舟町二丁目丸善兵衛」は施主の名前でしよう。秩父巡礼道沿いには同夫妻を願主とし、多くの施主の名を刻んだ石塔が50基以上あり、夫妻が江戸を中心とする商人と広いつながりを持つていたことが分かっています。

公共財としての石塔

供養塔を多くの方が行き交う道路沿いに建て、道しるべとしても扱えるようにしたのはなぜでしょう。熱田神宮の近くを流れる川には、戦死した息子のために母がかけたという戦国時代の橋が残っています。宝珠には息子の戒名とともに、この橋を渡ったのなら、どうか息子のために念仏を唱えてあげてほしいという文句が刻まれています。

亡くなった人が極楽浄土へ往けるように功德を積むことを作善と呼びますが、古代から道路をつくる、井戸を掘る、橋をかけるなどは、そのための有力な方法でした。有力武士や寺院など

大きな組織力と豊かな財力を持つ集団はもちろん、時代が下ると共通の信仰や商売上のつながりで結ばれた人々の寄進によつてもこれらの事業がなされました。道しるべも、旅人の安全を守るという意味で道路や橋と同じ公共機能を持つものと考えれば、作善の対象となつたことは理解できます。同時に先ほどの橋の例のように、供養する人間のみでなく、通りすがりの人や見知らぬ人の力も借りることで、亡くなった人が少しでも極楽浄土へ往きやすくなるようにしようとする深い思いをこの石塔からは見てとれるように思います。

